

---

# 「トライアングル＝エクシード/一光の魔女」

らいなあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「トライアングル」エクシードノ一光の魔女」

### 【Nコード】

N0513V

### 【作者名】

らいなあ

### 【あらすじ】

地球とは別の異世界。そこには「科学」が在り「魔法」が在り「錬金術」が在った。そんな世界である日、一組の兄妹の両親が殺されてしまう。両親を殺した女性は「魔法」の頂点<sup>うごく</sup>。少年は妹とハグしてしまうが、両親を殺した女性への復讐の為に「科学」を極める。それから十年が経った時、何故か少年は仇の女性と一緒に居た……。

## 第0光 始まりの魔法（前書き）

お早う御座います、今日は、今晚わ。らいなあです！

これは「科学」と「魔法」と「錬金術」を題材にしたバトルファンタジーです。（多分）

警告はありませんが、不定期になる予定です。悪しからず。  
では、お楽しみください。

## 第0光 始まりの魔法

「お父さん！お母さん！」

燃える民家の中で小さな少年が両親を呼ぶ。――しかし返事は返って来ない。

「お父さん！！お母さん！！」

更に強く名を呼ぶ――が、やはり返事は返って来ない。

「おにいちゃん……」

側に居た妹らしき少女が少年の袖を引く。瞳に映る色は不安と悲しみ。そんな妹を見て少年は……。

「だ、大丈夫だって、心配するなミレア」

流石、兄と言うべきか。こんな状況下で妹を心配させまいと、自分の感情を押し殺して妹を宥める。だが、まだ幼い少年。完全に押し殺せるはずも無く、不安がちらほらと見え隠れしていた。

意外と子供と言うのは感情に機敏に反応するものだ。兄の見え隠れする不安を感じ取った妹は、今にも泣きそうな表情で少年の袖にしがみ付いている。

少年はそんな妹を守るように後ろに回し、とりあえず脱出しようと出口へ向かう。そんな二人の前に……。

「あら？子供？」

推定二十歳前後ぐらいの若い女性が立っていた。その足元には真っ赤な液体が海のように広がっている。

「お父……さん？お母……さん？」

少年は驚愕する。何故なら真っ赤な海に沈む様に、兄妹の両親が横たわっていたからだ。

「なに………を？」

無意識に妹にその光景を見せない様にしつつ、少年は女性に問いかけていた。

「殺したのよ」

女性はケロッとした表情で即答した。その顔色には罪の意識など欠片も無い。

「何……故？」

ドンドン嘔れていく声を振り絞り、もう一度女性に問いかける少年。

「さあ？邪魔だったんじゃない？」

まるで他人事の様に首を傾げた女性に、ついに少年の我慢も限界を超えた。

「貴様アアアアアアア！」

少年はどこで覚えたのか、とても八歳の少年とは思えない声で女性に殴りかかる。

「危ないで……しよっ！」

だが所詮は子供、殴る前に女性に簡単にあしらわれてしまう。

「くっ、この！」

少年はもう一度殴りかかろうとして……

「眠りなさい」

素早く少年の目の前に移動した女性が手を少年の顔に翳すと、紫色の小さな魔法陣が現れ、少年の意識を一瞬で奪う。

「おにいちゃん！？」

一部始終を見ていた少女は両親の事を理解してないのか、真っ先に兄の心配をする。

「妹？貴女もお休みなさい」

コツコツとハイヒールの音を鳴らしながら、女性は少女の目の前まで歩き、少年と同様に顔に手を翳した。紫色の魔法陣が現れ、少女は意識を失った。

女性は少女と少年を抱え、死んだ人には目も呉れずに民家を出る。  
「はあ、汚れ役って辛いわあ……」

女性の呟きは風に流され、誰の耳に届く事無く消え去る。

女性が<sup>かが</sup>屈んで跳躍の準備をすると、地面に先程より大きな白色の魔法陣が現れ、高速で回転を始めた。そして女性は足を伸ばし切つて跳躍する。それを補助する様に魔法陣が跳ね上がり、現実には女性を高く高く押し上げた。

「さあて、どこ行こつかな？」

次々と現れる魔法陣を蹴りながら、空中を駆けて行く女性はそう言った。

## 第0光 始まりの魔法（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次回は一気に飛んで十年後。主人公の少年が十八歳の時になります。  
御意見御感想をお待ちしています！

## 第1光 二等機構士の天才（前書き）

今回、説明が多いかもしれません。

気を引き締めないとヤバイかもしれないです。



## 第1光 二等機構士<sup>ルミエスデス</sup>の天才

「……………きて！起きなさい！起きろー！」

「んだよ、うつせえなあ……………」

とある少女の、絶叫にも似た起床を促す声に、止む無く少年は身を起こす。

少年の表情は、とても機嫌が悪そうだ。しかし、それに負けじと少女の機嫌も中々悪い。

「うつさい！アクト、貴方今日が何の日か忘れてる訳じゃないでしょうね！？」

メートルと離れてない距離から、一キロ先まで届きそうな声量で少女は叫ぶ。

故に、アクトと呼ばれた少年が耳を塞ぐのは当然の事柄だろう。

これで元より機嫌が悪い少年の機嫌が目に見えて悪くなっていくのは、当然の結論だ。

「ああ？ジジイどもの下らんお遊戯ゴツコだろ」

「あ、貴方……………」

少女の顔色が見る見る真っ青になっていく。

アクトという少年は何か不味い事でも言ったのだろうか？

「げげげ、元帥様をジジイだなんて！しかも一等機構士<sup>ルミエスデス</sup>級授与式をお遊戯ゴツコ！？貴方正気！！？」

相も変わらずガミガミ、近くに居るのに叫ばなければ少女は話せないのだろうか？その位音量が大きすぎる。深夜なら間違い無く近所迷惑レベルだ。

「訂正しなさい！私の夢を訂正してー！！」

少女はアクトの首をガツシリ掴み、取れるんじゃないかと言う程前後に振り出した。

先程の話では、どうやら少女の夢は一等機構士と言うものになりたらしい。見た所、少年と少女の年齢は同じ位だから、少年が少女より優れている事を証明しているのだろう。

睡眠を邪魔され、頭を振られ、いい加減アクトの怒りも頂点に差し掛かった。

「ああもう！事実だろうが！お前も俺に構っている暇があつたら訓練でもしてろ！！」

アクトはそれだけ言うと、明らかにイラついた足取りで何処かへ行ってしまふ。

それを見ていた少女はと言うと、

「私の夢」

遠くなるアクトの背中に手を伸ばして泣き掛けていた。  
ハッキリ言つて馬鹿である。

この世界には三つの強大な力がある。それが「科学」であり、「魔法」であり、「錬金術」だ。

その三つの強大な力をそれぞれで独占する三つの国家。

科学を有する『科学国家ヴァンデル』

魔法を有する『魔法国家フォルティス』

錬金術を有する『錬金国家マグリシア』

この世界ではこの三つの国家が三つ巴の情勢を保っていた。

他が有する力を手に入れる為に、三つの国家がそれぞれで他国家に戦争を仕掛けている。

だが戦力は均衡し、それ故の終わらない戦争を続けていたのだ。

これはそんな情勢の中、とある者達が経験した物語である。

先程アクトと呼ばれた少年と、そう呼んだ少女が所属するのは『科学国家ヴァンデル』。

帝国主義の国家で、大元帥を長とする元帥機関によって統治・管理されている。

領土は陸続きで領土のほぼ中心に、『帝都・ヴェンドリア』がある。アクトと少女は、帝都の軍士養成所所属の士官候補生だ。二人はその帝都の兵舎に寝泊りしていた。

町外れにある兵舎から出てきたアクトは誰が見ても不機嫌そうだ。背後に鬼の様なオーラを漂わせている。

「あんのくそフィル！どこまで俺の邪魔をすれば気が済むんだ！！」  
あの少女はフィルというらしい。性格は言わずもがな。アクトの言動から見ても、お節介と言いか何と言いか。アクトは迷惑しているようだ。

「よう、アクトくん」

グチグチと日頃の不満を吐露していたアクトの前に、太った体型の馬鹿みたいな顔をした男性が近付いて来た。その口調は馬鹿にしたと言いか、おちよくつていと言いか、とにかく癪<sup>かん</sup>に触る声音である。

「何だ？」

明らかに年上でも、相手の事を知って無くても関係無く、アクトは不機嫌さを隠す気も無く睨んだ。

「おうおう先輩でも関係無しかよ。一等機構士<sup>ルミエスデス</sup>級を授与されるからって調子に乗ってんじゃねえのか？ああ？」

一等機構士とは階級みたいなモノ<sup>ルミエスデス</sup>の様だ。先程の少女の反応とこの男性の反応から察するに、一等機構士はそう簡単に取れる物でも

ないのだろう。

アクトは心の中で「またか」と、半ば諦めた様子で呟いた。

昔から口調とか目付きのせいでケンカを売られた事はあったが、  
ルミエスデス一等機構士授与の話が出た途端、前にも増してケンカを売られるようになった。  
いわゆるねた所謂妬みである。

ルミエスデスこの男性もその一人、一等機構士になれなかった哀れな軍兵なのだろう。

「妬みでケンカを吹っかけんじゃない。お前と違って俺は忙しいんだ」

「こ、こんの……！！」

凶星を言われたからか。はたまた口調からか。男性は怒りを携えたまま、力の限りアクトを殴ろうと拳を振り上げた。腰の入った威力のありそうなストレートの上、その手に白色の光が纏われている。「遅い」

しかしアクトは意に介さず、少し左にずれた。アクトの右頬を拳が掠めるが、それは掠めたと言うより、完全に見切って回避したと言う方が正しい。

次の瞬間、アクトの後方にあった地面が音をたてて少し抉れた。男性のせいである。

しかしアクトはまたも意に介さず、カウンター気味に、白色の光を携えた右拳で男性の右頬を掠めた。避けられたのではない。当てなかったのだ。というより男性には速過ぎて見えなかった事だろう。男性の右頬を掠め、伸びきった腕を戻したアクトは、何も言わずに振り返った。

刹那、男性の後方にあった地面が爆発音と共に“無くなった”。

深さ二メートル、全長十メートル程のクレーターが出来ていたの

だ。

男性はそれを見た瞬間、腰を抜かして地面に倒れ付す。

「お前ならどういふ事が分かるだろう？これがお前と俺の実力差だ」  
アクトはそれだけ言つと、また何処かへ歩いて行つた。後には真つ青な顔の男性とクレーターがあるだけだった。

先程のワザは簡単な原理だ。白色の光の正体は“<sup>エーテ</sup>圧縮された万能粒子”。

軍に入つた兵士候補生は最初の武器として、“<sup>エーテルリング</sup>粒子発生装置”という腕輪を渡される。これは<sup>エーテル</sup>圧縮された粒子を、攻撃・防御・身体能力強化に転用できる腕輪型の装置だ。

使用者の脳波を感知し、使用者が思つた通りに粒子を発生させる。つまりは、使用者次第で無限の可能性を秘めているのだ。

男性はそれを拳に付加し、一時的にストレートの威力を高めた。

養成所に入つて最初に習う、簡単な攻撃方法だ。男性はそれで、拳を当ててない筈の地面を抉るという事をやって見せた。あれは熟練した兵士でも無い限り不可能である。それが、男性は強いと言ふ事を証明している事に他ならない。

しかし、アクトは同じ攻撃を放つたにも関わらず、深さ二メートル、全長十メートル程のクレーターを作つて見せた。ようはどういう事か？

単純明快、男性とアクトの実力差を示しているのだ。

男性がどの位強いかわからないが、アクトの敵ですらなかった訳だ。

もし、あの攻撃を男性に命中させていたら、今頃男性は髪の毛すら消え失せていた事だろう。

「大体、<sup>ルミエスデス</sup>一等機構士を授与されると言ふ事はそれだけ実力があると何故わからねえんだ？どいつもこいつも……」

自分で言つなという感じではあるが、アクトの言つ通りである。  
フィルが一等機構士を夢見るだけあって、敷居は途轍もなく高い。

筆記テストで満点の九割点数を取らなければ即落第の上、実技テストで審査官から一本取らなければ受かる事は出来ない。

更に審査官は「科学」の頂点、その直属の独立部隊が引き受ける。  
頂点の独立部隊は、一人で万の敵を蹴散らす程の実力者が何人も居る部隊だ。

間違い無く、気を抜けば一瞬で塵に成れるレベルの実力だろう。  
でもそれを、アクトはノーダメージで勝つ事が出来た。筆記は文句無しの満点。

以上の事からアクトは間違い無く天才と呼ばれる部類だ。先程の男性なんて一般人と大差無い位に。

「授与式は夜からだったな。外でもぶらついてくるか」  
アクトは街中へと足を向けた。

この広大な帝都では交通機関がうざったい程ある。

電車、地下鉄、モノレール、車、飛行車。もはや地上も空中も常に何かが走っている様なものだ。

歩く奴なんてよっぽどの物好きか、金が無い貧乏人ぐらいだろう。  
アクトは士官候補生なので、国から給料を貰っている。しかも現在、二等機構士級を受け賜っているのだ、そこら辺の儲かっている商家より金を持っている。ましてやアクトはあまり金を使わないので、資産総額は馬鹿みたいにあるだろう。

しかし、アクトはあまり乗り物を買いたがらない。歩くのが好きなのだ。

実を言うとアクト自身、その理由が分かっていない。

「何でだろうな？」

中心部にある商業区を歩くアクトは、そう呟いた。

彼は思う。今日で二等機構士から一等機構士になるんだ。  
ミリアリア ルミエスデス

月収は二等機構士の三倍、下士官への命令権、直属兵士の任命、一般雑務の免除、その他にもメリットは色々ある。ただ、元帥直々の特殊任務や下士官への実技指導・筆記指導などの仕事も新しく追加されてしまう。アクトとしては面倒臭いみたいだ。

ちなみに今、アクトは軍士養成所所属の士官候補生なのだ。簡単に言えば、“まだ訓練生”と言う事。

訓練生でも階級は与えられるが、軍士養成所時点で一等機構士を受け賜るのは、『科学国家ヴァンデル』の約三千年の歴史上、八人程度だ。

アクトがその九人目という事になる。

更に言うなら、その八人の内五人が「科学」の頂点トップになっている。アクトは頂点トップに一步近付いたと言う事だ。

何て考えていると、正門の所まで来たみたいだ。アクトは正門を見上げながら、思考をする。

無駄だろう、と。

全高七百メートル（東京タワーの約二倍）、横幅三百メートル、厚さ二メートルという、無駄を詰め込んだ様な正門だ。しかも、通常はその横にある副門（全高五メートル、横幅五メートル）を使っていると言うのだから無駄でしかない。

正門を使う機会なんて、待ち合わせか、帝都の全軍が他領土へと進行する際にしか使われない。

正門が開くのは、全軍出陣の合図みたいなものだ。無駄である。更に更に、あんなに大きな正門を造っても、帝都の上空には敵の

侵入を許さない不可侵領域が張り巡らされている。これを行き来出来るのは、軍に登録された味方だけだ。

まあ、国家の象徴といえば、正門の価値も多少はあるが、やはり無駄である。

アクトは無駄無駄考えながら、副門に居る武装門番に士官候補生用IDカードを提示する。IDカードは帝都民だったら誰もが持っている身分証だ。

「士官候補生？何の用だ？」

ゲートキーパー  
武装門番が不審がるのも仕方が無い。

本来、士官候補生は軍士養成所を卒業しないと、外に出るのは不可能だからだ。

だがそれも、階級の問題である。

「ん？階級は………二等機構士！？すみませんでした！！」

「いや、いい」

ゲートキーパー  
アクトの階級を見た瞬間、武装門番は血相を変えて腰を曲げた。

しょうがない事だ。士官候補生とはいえ、上官に盾突いたら死罪

が基本だからな。

ゲートキーパー  
と言う事から、この武装門番は三等機構士という事になる。

ゲートキーパー  
武装門番はそこそ力が無ければ勤まらないので、三等機構士以

ゲートキーパー  
上じゃないと武装門番には就任出来ないのだ。

ちなみに階級は一等から五等まである。

ルミエスデス

一等機構士。

ミリアリア

二等機構士。

マシリスローク

三等機構士。

アリストラル

四等機構士。

クロルヴァン

五等機構士。

更に、騎兵・歩兵・重機兵・砲撃兵・救護兵などなど。役職によつて呼び名は変わったりする事もある。



アクトは士官候補生ではあるが、役職クラスの中でも特殊とされている  
戦鍵兵ヴァンを目指しているのだ。話を戻して。

アクトはIDカードを帝都民認証装置に通し、副門を抜けていく。  
後ろの方で、先程の武装門番ゲートキーパーが「いつてらっしゃいませ！」とか  
明らかに媚こびた様子で言っているが、アクトは全く聞いていなかった。

## 第1光 二等機構士の天才（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次回は何時になるのやら……。まあ、頑張ってみますけど。  
御意見御感想お待ちしています！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0513v/>

---

「トライアングル＝エクシード/一光の魔女」

2011年8月5日03時24分発行